

ビーの笛



大熊米子

うつつば物語より——俊蔭の漂流譚 にヒントを得て

むかし、ベルシャの国の海べに近い林の中に、ビーとよばれる男の子がおりました。ビーは、とても可愛い子どもです。つやつやした赤い頬っぺは、まるでお日様のようには輝いていましたし、其の目は、いつでもお星様のようにならきら光って見えました。

誰だってビーを一目見た人は、「ビー可愛いビー」と呼ばないでおられませんでした。

でもね、誰もビーがどこから来たのか、それに、ビーのお父さんやお母さんのことを知っている人はありませんでした。ただ、皆知っていることは、ビーは、ある日どこからともなく駆けて来た青い美しい馬の背中に、すやすや眠っていたことだけでした。その不思議な馬は、ビーを、林の中の青い草の上にそーっとねかすと、さも自分の用事はすんだというように、一声高くヒーンといないて、また海の方へ駆けて行ってしまったのでした。

其の林の中の、青い草の上では、ウーさん、リユーさん、チーさんという三人の笛吹きが、ちょうど笛を吹いて遊んでいるところでした。

「おや、可愛い子どもだ、わたしたち三人で育てましょう」

三人の笛吹きたちは、この可愛い子どもをそれはそれは可愛がって育てました。子どもは、まるで神様の子のように、美しく、賢く育ってゆきました。こんなよい子がいるかしらと思えるほどでした。三人の笛吹きたちは、この子に笛を吹くことを教えたのですが、その覚えのよいこと、まるで、昔から笛を吹くことを知っていたように、三年の間には、この三人の知っている曲は、もうみんな覚えてしまいました。それに、その音色のよいこと……いつのまにか、皆は、この子のことを、笛の音をそのままに、ビーとゆうようになりました。

ビーは、花の蜜をなめ、木の実を食べて、葉っぱの露をのんでいました。りすや孔雀も、虎も象も鱈も、林の中の動物は皆お友達でした。林の中をかけまわって遊ぶときは、いつもビーがまっさき立っていました。またビーが笛を吹くと、その友だちは、いつでもまるく輪になってビーのまわりに坐って静かに笛の音を聞いていました。

ビーはある時、自分の笛の音に通う澄んだ音を聞きました。ビーの笛の音と、その不思議な音は、とけ合ってからみあって、世にも美しい音になって空の中に吸いこまれていくのです。

「ねえ、ウー小父さん、あの音はなあに？」

「音って？ 小父さんには何も別に聞えないよ」

「ほら聞えるじゃないの、ね、リユー小父さんには聞えるでしょう？」

「……音が聞えるって？ ビー 小父さんにも聞えないよ」

「ううん、聞えるのよ、聞えるのよ、ね、チー小父さん、聞えるね」

「ビー坊や、坊やは疲れたんだよ、坊やのお耳の中で聞えるんじゃないかい？」

ふしぎな音は、三人の小父さんには誰にも聞えないのです。でもビーには、どうしても聞えるのです。ビーがある日、兎たちと遊んでいる時、笛を吹くとまたあの音が聞えます。

「ねえ、虎くん、鹿くん、聞いてちょうだい、僕が笛を吹くと、どこかで何かの音が聞えるね、ね、ほら、聞えるでしょう？」

象も孔雀も鹿も兎も、耳を空にむけて、一しゅうけんめい音を聞きわけようとしました。

「あっ、聞える！ 聞えますよ、かーん／＼てね」

一番先にそう云ったのは、やっぱり、お耳が一番よさそうな兎ちゃんでした。

「えっ？ うさちゃん聞える？ ね、聞えるよね、あれ何の音だと思おう？」

「……あれはね、遠くの遠くの山で木を伐り倒すような音ですよ、きつとそうだと思いますよ」

「えっ？ 木を伐ってるの？」

「……本当だ、聞える、聞える」

やがて他の動物たちも云いました。……

「でも変だねえ、この辺に山なんてないし、それに……木を伐る人なんて見たことないものどうして木を伐る音が聞えるの？」

一番考え深そうな熊が云いました。本当なのです。見わたす限り、海と野原と低い林が続いていて、どこにも木を伐りそうなお山は見えないのです。そうすると、よほど遠くの山だということになるのですが、どうしてそんな遠くの山の音が聞えるのでしょうか？ 皆しばらく考えていましたが、そのうち、ビーが目を輝かせて云いました。

「ねえ、今伐ってる木はね、多分、とてもよく音のひびく木なんだよ、僕、あの木がほしいなあ……あんな木で笛をつくったら、どんなにいい音がするだろう！ 僕ほしいなあ……」ビーは、それからというものの、どうしてもその木を、少しでもほしいと思う気持をとめることが出来ませんでした。それで、ビーは、ウー、リユー、チーの三人のおじさんたちにお別れして、その木を伐っている山を探しに行くことにしました。でも、三人のおじさんたちは、可愛い可愛いビーが行ってしまうのを、とても残念がりましたし、また小さいビーが、そんな遠くへ、一人では行かれないだろうと心配しました。ところで、林の動物たちは、ビーが笛の木を探しに行きたいということを知ると皆大賛成をしました。なぜって、皆ビーの笛が大好き

でしたから……そうして皆でビーのお伴をすることにしました。

「さようならあーよく気をつけてねー」「さよならあー」

「行ってきまあーす」元気にビーと動物たちは出掛けました。

でも、木を伐る音だけをたよりのビーの旅行は、それはそれはたいへんなものでしたけれど、またそれはそれは面白いものでした。皆なかよく楽しい旅行でした。ときどき道が判らなくなると、ビーは笛を吹きます。うさちゃんは耳をピンと立てて、どっちの方角から木を伐る音が聞えて来るかを聞きました。ビーが、もうくたびれたような時は象君が、ビーとそれからりすさんや猿さんや、小さいものをその背中にのせて行きました。海を渡る時はわにが友だちをよび集めて、皆を安全に渡してくれました。谷を渡る時は猿さんの仲間が谷から谷へ猿橋をこしらえてくれました。

こうして、毎日毎日歩いて、どのくらい旅行をしたことでしょうか。あるとき、珍しく高い山に着きました。

「此の山かもしれない！」

皆は男んでえっさえっさと登りました。でもかーんかーんという、木を伐る音は、その山から聞えたではありませんでした。もう一つ向うの山から聞えるらしいのです。しかも、その山は、お猿さんだってすべり落ちそうな急な道で、てっぺんは雲の中に入っていて見えないほど高いのです。皆はくたびれてがっかりして顔を見合せました。……でも、やがてビーは、ほっぺを輝して笛を吹きま

した。優しい、静かな、美しい曲です。その曲を聞いているうちに、鹿も兎も熊も象も、皆元気になりました。かーんかーん、澄んだ、木を伐る音が、はつきりと其の山の裏側から聞えてくるのです。

「さあ、行こう!!」

ビーの笛は、いつか勇ましい曲になりました。皆元気百倍、その険しい山ものぼりつくしました。雲の中にかくれて見えなかったその山のとっぺんに立った時、どんなに皆うれしかったことでしょう。助け合って、力をつけ合って、本当に仲良くここまで来たのですもの、……皆が、苦しかった道のことを思い出しながら、山のぐるりを見まわしていました。すると、あっ!! ありました。ありました。この山の西側に、其の根は谷底深く生え、枝はお隣の国の方まで出て、そのとっぺんは天まで届いているような大きな木があるのです。それをとりまいて、これはまた、何と小さい小人がたくさん集って、その木を伐っているのです。皆は、やっとやっと探し求めていたものが見つかったので、嬉しくて嬉しくて、それぞれの声で喜び合いました。象もお猿も兎も声を限りに歌いました。ビーは、嬉しい気持ちで笛で吹きなりました。その珍しい合唱に、あの大きな木も響きを合せました。深い谷を一ぱいに埋めた美しい音楽は、山々に響きわたりました。それで、小人たちは驚いて手をやすめ、ビーたちを見つげると、皆でとんで来てビーたちのまわりを取り巻いて踊るのでした。やがて一周年をとった小人が出て来て、

「私たちは、長い間あなた方を待っていたのです。この山の神様が、今ここに来られる可愛い方は笛の神様になられる方だから、この木で笛をつくってさしあげるようにとおっしゃったのです。

この木は珍しい木で、音が美しく響くことは、くらべるものがないのです。それで私たちは、毎日毎日枝を伐りおろしては笛をつくりつづけました。……はい、これが、この山の神様からあなたにさしあげる笛です……でもよくここまであぶない道に来てくださいましたね」

ビーの喜びはどんなだったでしょう。すぐには声も出ませんでした。……やがてビーはその笛の一本をとり上げて、いっしょうけんめい吹きました。

こんなにたくさんさんのすばらしい笛を下さった神様に。それから、毎日毎日ビーの為に笛をつくって下さった小人さんたちに、それから、一人ではとても来られなかった道を、ここまで連れて来てくれた親切な動物たちに、そして、遠いベルシャで、ビーに笛を吹くことを教えて下さったウー、リュウ、チーの三人の小父さんたちに、皆に、皆に心から「ありがとう」を云うつもりで笛を吹いたのです。

その音がどんなにきれいだったことでしょう!!

あのね、その音は、今でも鳴り続けているのです。皆さんが心からどなたかに「ありがとう」って云うとき、皆さんの心の中で、ビーの笛が鳴っていますよ。(おわり)